

ヒガンフグとトラフグの産卵群を守りたい

栽培推進部 工藤孝浩

昨春のこと、本メルマガの読者から「産卵のために集まったヒガンフグを大量に採る輩がいる」とのメールをいただいた。そこは、以前から産卵場かも？と気になっていた場所で、具体的な産卵の情報に接したのは初めてだった。「是非とも初めての場所での産卵を見てみたい」と魚の生態観察好きの血が騒いだ。

産卵が予想される日時に現場に駆けつけると、見知らぬ方から「工藤さんですか？」と声を掛けられてびっくり。その方は、情報をもたらしてくれたメルマガ読者だったのだ。私の顔は出版物等で分かっており、「もしかしたら現場に来るかも？」と思っておられたそう。

海では30cm前後のヒガンフグの群れがいくつか確認され、「やっぱりここで産んでいたのか」と感激。我々など気にせず追いかけっこ（本当は産卵行動です）に没頭する姿に愛おしさを覚えた。ところがそこには、情報どおり採捕者の姿があった。

フグの産卵を見守りに来ただけだったのに、採捕者に出会ってしまったのは見過ごすわけにいかない。こちらは2人組になったことで意を強くし、思い切って声をかけた。もう、心臓バクバクのどはカラカラだ。

採捕者はふり返ると鋭い眼光でにらみ返し、ゆっくりと近づいてきた。赤銅色に焼けた顔には多数の深いシワが刻まれている。そして、内心ビビリながら立ちつくす私の顔をのぞき込むと、初めて口を開いた。「工藤さんじゃねえか？」

これには2度目のびっくり。よく見れば知った顔の地元漁師だったのである。ここ何年も港で見かけないと思っていたら、歳をとったので船を手放したのだという。それでも時おり、手なぐさみに陸周りで魚や貝を採っているそう。漁師が採るのは止められないが、「産卵に来たフグは断じて採るべきでない」と諭して場を去った。

産卵に集まったヒガンフグの採捕を禁じる法令等はないが、「魚採りには正義とモラルが必要なのだ」と、良心に訴えるしかないと思う今日この頃である。

ひるがえってトラフグである。

一昨年の春、東京湾口では前代未聞のトラフグフィーバーが湧き起こった。乗り合いの遊漁船がこぞってトラフグ釣りに出たのである。ターゲットは産卵のために集まった群れで、たっぷりの真子や白子をもった良型がバンバン釣り上げられた。当然、資源への影響が懸念される（写真）。

卵を産もうとしているフグはそっと見守り、産ませてやりたい。言うは簡単、だがやるとなるとどこから手をつけるのか？と途方に暮れてしまう。相手が普段からつき合っている漁師ではなく一般の釣り人であること、県外の船やプレジャーボートも釣っていることなどが、事態をよりややこしくしている。

しかし、遊漁船の現場には光明がみられる。小さなフグの放流を促す意識が高い船頭や、持ち帰るフグの数を決めて早々に竿を納めるお客さんが現れており、自主的に小型フグを放流するお客さんも少なくない。末永くトラフグ釣りを楽しみたいという思いは、みな一緒なのである。

トラフグの人工種苗を10年にわたって放流し続けてきた成果をより確かなものにするために、皆

で知恵をしぼって産卵群を守る手だてを講じていきたい。時間は掛かるかも知れないが、その日はきっと来ると信じている。



写真3：東京湾口でねらって釣れたトラフグ（2016年4月）

マサバの小型化の謎

企画資源部 武内啓明

早いもので、年が明けて1週間が過ぎ、まもなく「さばたもすくい漁^{注1)}」のシーズンが到来します。水産技術センターでは、産卵のために伊豆諸島周辺に集まるサバ類の成熟状況や年齢構成などを調べるために、毎年1～6月にかけて漁業調査指導船「江の島丸」による漁獲調査(図1)を行っていますが、ここ数年、漁獲物の小型化という気掛かりな変化がみられています。

通常、伊豆諸島周辺のさばたもすくい漁では成熟したマサバを漁獲するため、体重500g以上の大型魚が主体となるのですが、私がサバの調査を担当するようになった2015年頃から300g前後の小型魚(図2)が混じりはじめ、2016、2017年には小型魚が漁獲物の大半を占めようになりました。これほどの小型化は過去に例がなく、国の研究機関などで原因究明に向けた研究が進められています。現段階では、①資源量が急増したことにより餌が行き渡らなくなった、②マイワシの資源が増加したことで餌をめぐる競合が起きるようになった、③生息域の低水温化により成長が鈍ったなどの説が挙げられていますが、はっきりとしたことはわかっていません。

研究機関としては何とか対策を打ちたいところですが、広大な海に暮らすマサバに餌を与えるわけにもいきませんし、海水を温めて成長を促進させるわけにもいきません。人為的にサバの成長をコントロールできないことを踏まえると、今後は“小型魚をいかに有効活用するか”という視点で研究に取り組む必要がありそうです。

注1) 集魚灯やまき餌を使ってサバの群れを海面に集め、たも網を用いてサバを獲る漁法。例年、1～6月頃に伊豆諸島周辺で漁が行われ、1～2月に獲れるマサバは特に脂乗りが良く美味とされ、「寒サバ」と呼ばれます。



図1 たもすくい漁の操業風景（漁業調査指導船「江の島丸」）

集魚灯とまき餌を使って海面に集めたサバをたも網を使って漁獲します。ここ数年はマサバ資源が増加したこともあり豊漁ですが、単価の低い小型魚が多数を占めるようになっています。



図2 漁獲物の主体となっている小型のマサバ

2017年に漁獲された推定4歳魚。体が小さいだけでなく、痩せ型で、餌不足の可能性を感じます。まだ子供の様に見えますが、このサイズでも発達した卵巢や精巣をもっており、産卵に加わっているようです。